

序

われわれの考古学研究室研究紀要も、1982年に創刊以来、号を重ねて、ここに第8号を刊行する運びとなった。本号もまた、研究室諸氏の日ごろの研鑽の成果を収めることができたことを喜ぶとともに、寄稿された諸氏の協力に感謝したい。

この一年間は国内外に大変動が続き、激動の年であった。この激変はまさに20世紀総決算の始まりと言うべきものであるが、これが歴史学を学ぶ者に深い衝撃を与えたことはいまさらいうまでもない。

考古学の分野においては、考古学の大衆社会化現象がとめどなく華やかに進んでいるが、それにもかかわらず日本全国では、多くの研究者が土にまみれて地道に資料を集め、研究に励んでいることを忘れてはならない。

今日の考古学は、その対象が時間的にますます広がり、先史時代から近世までも含むようになったことは衆知のことである。はじめは、新しい時代の歴史はすでに文献によって明らかにされているから、考古学は文献史学の補助的役割しか果たせないものと考えられていた。しかし実際に考古学的発掘調査をしていくと数々の新しい知見が明らかになってきた。たとえば中世・近世考古学においてもっとも基本的な資料である陶磁器の研究によって、当時の物資流通の過程が明らかになってきたし、また中世・近世の遺跡の研究から、当時の都市や墓地の様相も明らかにされつつある。さらに考古学からみた近世の陶磁器の研究などでは、アジアだけでなくヨーロッパまでも含めた国際的な視野に立った研究も必要になってきている。いわゆる貿易陶磁の問題である。これなどは物資流通のこれまで十分明らかになっていない面を究明する重要な分野である。しかしそのためには、発掘された数多くの陶磁器片について、幅広い視野に立ちながら、かつ精密な考古学的調査を続けていくことが不可欠である。

このような最近の考古学の動向からみて、考古学は文字の無い先史時代から文字の豊かな近世までの遺跡遺物を研究して、はじめてそれ自体独立した体系をもつ科学となり得るのではないかと考えられる。それは言うなれば人間史である。そのような考古学を文献史学が補助学として用いることはもちろんかまわないし、またそうあって欲しいと望んでいる。

いまや全国すべての考古学の状況を、一人の人間が把握するには物理的に不可能なほど資料が増加してきている。しかし考古学研究者が広い視野と柔軟な姿勢で地道な研究を続けていけば、必ずや考古学の新しい展開が見られるであろう。

なお最後になったが、本紀要の英文要約の校訂に当たってマーク・ハドソン氏のお世話になったことを記して感謝の意を表したい。また編集に当たった今村啓爾助手の労を多としたい。

上野佳也